

菊池短歌会

11月例会

水張りし休耕田に水馬己が天下と光を砕く
梅野かをり
雨霧ろふ遠嶺の景に六十年安らぎ将また耐えて来りし
山下 菊代
今少し迷へる背を押しくるる秋明菊の天真爛漫
黒田 衣子
弱り来てつひに蘇らぬリラの木にたつぶり注がむ訣の水を
佐々木かつえ
朝は風ぎて光りきらめくこの川の葦の根方に鴨ら相寄る
梅田 昭子
今日発つか明日か燕病み夫と待つ身ながき冬と知るまじ
竹野美智代
富有柿の初実りを摘む手に受けて重きひとつのその柿色を
中原ちえ子
しみみとけふの一會そ夕焼けに花野はせつにかがよひてをり
村上 咲江

万句の里俳句会

11月句会

一年の精根集め菊花展
田中ひさ子
糶田は日射し静かに萌ゆる日々
東 鈴子
丹念に拝殿磨き神の留守
稲田 玲子
庭畑の帯木紅葉夕明り
梅田 昭子
風に身を任かせて軽き木葉雨
光本とよいち
吹き抜くる風の軽さや枯尾花
小山 照子
この奥は古刹へつゞく落葉徑
田中 美智
初時雨庭美しくして去りし
吉井 綾子
家よりも古きを誇り松手人
北村 君子
枯菊の焚かれ孤高の香を残す
丸山美代子
静かさをなほ深めゆく夕時雨
岩木 敬治
ブッセの詩ふと口ずさむ紅葉山
打出 貞

肥後狂句桜会

11月例会

お待ちかねやつと娘の岩田帯
田中 孝幸
憎い男酔うと体が会いたがる
高倉 新米
這い回り草と喧嘩の絶えん庭
狩野 本六
勝負あり潮の引きよる外野席
太田 雄三
憎い男うちが人生くるわせた
安武 二山

泗水短歌会

11月詠草

慌てました混浴だった露天風呂
荒木 玄海
勝負ありまわし取ったら電車道
窪田 明徳
覚え立てなかなか出らん母の味
須藤 新生
勝負ありオモチャ売場で寝転ばれ
東 哲哉
お待ちかね予定日ばかり聞かす母
藤野 清子
勝負あり組合せ見て震えよる
小川 繁美
お待ちかね主役がこんと始まらん
中山 昌子

せせらぎ俳句会

11月例会

迷ひ道せしも善きかな山紅葉
藤本 邦治
手ずれ歳時記録るや冬夜のひとりの灯
坂本まつえ
うごめいて枯蟻螂でありしかな
内村 泊虹
障子張り替えて明かるき一ト間かな
服部 静子
石路が迎ふる旅の天草路
藤本アツ子
粧へる山より神楽笛太鼓
村山 数恵
夫の忌を修し八ツ手の花に佇つ
吉岡 民子
御降嫁の姫君稟と秋の日に
寺本 和子
老の身にあまりに酷し虎落笛
内村 鈴子
胸の辺に紅葉且つ散る露天風呂
五丁 義昭
ひつじ雲夕日に白くうかんでる
(小六) 渡辺 大寿
羊雲夕日の中に吸いこまれ
(小六) 渡辺 一史

肥後狂句水笑会

11月例会

よーしたもん恋は思案の外て言う
左 党
とてつものにやよか家建てち夜逃げさす
三代
ほんなこて女帝も悪う無ア
英 坊

七城短歌会

11月詠草

ぶすくれて銭のなかつちすぐわかる
五女
とてつものにや月へ新婚旅行げな
千笑
ほんなこてなんで当選さしたつな
美由
とてつものにや親ばローンの当てしとる
水光
ぶすくれてなんべん呼んでも返事せん
三水
ほんなこて子を持つて知る親の恩
江彩
ほんなこて良かこつばかり云うとらす
乗仏
のらりくらり鰻に似た子きヤ育て
好茶

旭志文芸俳句会

11月詠草

サルビアの花赤々と色深し秋の名残りか手に揺らし見る
池田カツ子
真夜中の満月に我れ目醒されその莊嚴を仰ぎて止まぬ
堀 甲子
台風は葉を千切られし木屋に花の香すれば足を止めぬ
吉岡 充子
木洩れ目を浴びつつ確かこの辺り去年はありしむかごを探す
下川 つぎ
新米のとどき無沙汰の詫びも添ふ
芹川 のり子
花芒風にもつれて風が解く
中山 栄子
夏空に馭者の鳥唄吸い込まれ
中尾ヨシコ
金婚式迎えし朝や石路の花
芹川 蓉子
朝明けの星の息吹かこの冷気
出田みどり
秋夕べ山鳩の鳴き何語る
工藤 房子
秋の駅人皆山の幸持ちちて
水谷 ミネ
名も知らぬ夏雑草も国際化
岩根サチ子
暮早し畜舎の灯煌々と
東 芳子